

読むたび、新しい旅

# ひととき

hitotoki

5

2025

# 大阪 MADE IN

《特集》  
進化を続ける  
大阪のものづくり



《新連載》  
学者芸人サンキュータツオさんの職人探訪  
「サンキュー！マイ★スター」

定価 700円(税込)

実はすごいものづくり

メイド・イン・

大阪

Made in  
OSAKA

堺市の打刃物や泉佐野市の紡績など、高品質な大阪のものづくり。

8世紀、各地の仏像づくりに技術を乞われた堺の河内鑄物師や

近代に「東洋のマンチエスター」と称されるほど発展した綿紡績など、

その歴史は誇らしいものです。

そうした伝統を生かして作られる、いまの暮らしに寄り添った

刃物や綿製品、革靴などの名品を取り上げて、

大阪のものづくりを受け継ぐ人々の魂と技をご紹介します。

文＝山田清機（22頁、29頁、32頁、34頁）、編集部（35頁、37頁）

Yamada Seiki

写真＝荒井孝治

Arai Koji

大阪市にある日本で最も古い民間の製靴〈せいか〉学校・エスペランサ靴学院の生徒が作った靴  
[左上]堺伝置館で、堺打刃物の魅力を紹介するフランス人スタッフ、エリック・シュヴァリエさん  
[左下]日本の名だたる醸造メーカーの杉橋を製造、修理してきた藤井製桶所



ものづくりは  
人づくり

ものづくりが地域に根付くためには、職人技の継承に加え、技術をどう伝承していくかが問われます。大阪市西成区と堺市で次代へのバトンを渡そうと奮闘する職人たち取材しました。



大阪府立西成高校靴づくり部 [上] 部室中央で高校生らに靴づくりを教えるのは、ロカシューの大山一哲さん。右に立つ顧問の肥下彰男先生とともに活動をサポート [下右] 生徒に広い視野を持った大人になってほしいと語る校長の山田徳治先生 [下左] 靴づくり部の生徒たちがデザインし、仕上げた靴



1970年代頃の大阪市西成区鶴見橋商店街。靴店が並んでいる

Made in OSAKA

高校生へのバトン  
伝統の革靴  
〔大阪市西成区〕

大阪市の浪速区、西成区は古くから皮革・製靴産業が盛んな地域だった。昭和30年代には「靴を買うなら西成で」といわれるほどの隆盛を極め、特に婦人靴では全国の約70パーセントを生産する寡占状態にあった。しかし近年は安価な海外製品の流入によって廃業する工場が増え、70社を切るまでに減少。これは10年前の2分の1の数だという。

そんな寂しい状況の中、ひとり気を吐く男がいる。靴の製造、卸、販売を手掛ける「ロカシュー」の経営者、大山一哲さん53歳である。

大山さんは生粋の西成育ち。生家は小さな製靴工場がひしめく鶴見橋商店街の一角にあった。

「かつての西成の靴工場はみんなそうでしたが、1階が工場で2階が住居。生まれた時から靴まみれの生活でした」

一時は教員を目指したが、実家のアルバイトで自ら中敷きを入れた靴を道頓堀で偶然見かけて、人生が変わった。

「向こうから歩いてくる女性に思わず、



すみません靴を脱いで見せてくださいって頼んだらやつぱりうちの靴で、もう稲妻が走りましたね。これが自分のデザインした靴やったら、どないやねんって」  
 父親に頼み込んで、東京は浅草のエスペランサ靴学院で学び、イタリア留学も果たして靴づくりの世界に飛び込んだ。  
 天国も地獄も味わったが、いま大山さんが情熱を傾けているのが、人づくりだ。縁あってエスペランサ靴学院の学院長になった大山さんは、地元西成にある西成製靴塾の代表からも塾長への就任を打診される。その話し合いの中で、「西成

高校が近いから靴づくり部を作りましようよ」とポロリと言うと、代表が「大山さん、それおもしろいわ」と即応。早速大阪府立西成高校の山田勝治校長に話をつないでくれて、2022（令和4）年、日本で唯一の「靴づくり部」が誕生する運びとなったのである。

山田校長が言う。

「西成は日雇いの町として偏見の目で見られがちで、校名からうちの学校も偏見を持たれやすい。では偏見をね返すにはどうすればいいかと考えたら、西成には靴づくりというプライドを持てる産業があるじゃないかと。それを生徒に伝えたいと思っていたら、大山さんが部活の話を持ってきてくれたんです」

西成高校は2024年度からステップスクールに指定され、障がいのある子、外国にルーツを持つ子、貧困家庭の子、不登校だった子などが多く在籍する。

「今年度から『にしなり学』を開講して、大山さんにも靴づくりの授業を10コマ担当してもらいます。西成高校に来たことで、生徒に自信を持つてほしいんです」

靴づくり部の顧問、肥下彰男先生の案内で部室を見せてもらうことになった。

低い机の上にラスト（木型）、ワニ、イチケリ、裁ち包丁など異形の工具が雑然と置かれている。工業用ミシン、すき機などの機械類は、全て大山さんが自費

エスペランサ靴学院  
 [上] 皮革を加工する工具の  
 [下] この日、シューフィッ  
 教授では、シューフィッ  
 ティングの専門家を招い  
 た講義が行われており、  
 生徒たちが熱心に耳を傾  
 けていた



で持ち込んだものだという。

現在の部員は智輝君、聖也君、結子さん（3年生）、小統さん、紗那さん（2年生）、結奈さん（1年生）の計6名。1年間で1足程度のゆっくりとしたペースで、本格的な革靴を作り上げる。

ほとんどの部員が、靴づくりという珍しい活動に取り組んでいることが自信につながっているというのだが、意外にも、将来靴職人になりたいという部員は少なかった。3年生の聖也君が言う。

「卒業後は製菓学校に通います。製菓業界に就職して生活が安定したら、大山さんのエスペランサ靴学院で勉強したい。カフェを開いて、靴を磨いている間にケーキを食べてもらおうのが夢なんです」

大山さんも、必ずしも未来の靴職人を

養成したいわけではないという。

「最初はまったくしゃべらなかつた子に、いまからミシンするからおつちやんの方見てみ、なんて言うと、パツと目線が上がってだんだんコミュニケーションが取れるようになっていく。それがものづくりのすごさです。靴づくりは厳しい世界だから、心の底から靴を作りたくなつたら、その時に再開すればいいんです」

顧問の肥下先生の思いはまた、別のところにあるようだ。

「日雇いの労働や皮革産業で日本社会の底辺を支えてきた西成は、日本有数のセーフティーネットを持つ地域でもあります。西成の生徒たちには、日本中に貧困が広がっていく時代だからこそ、この地域が大切に紡いできたものを全国に向けて発信してほしいと願っているのです」

大山さんの人づくりのもうひとつの拠



エスペランサ靴学院の生徒、沢田ゆりさん作の靴は、履きやすさ重視の曲線と見事なツヤ



点、エスペランサ靴学院を訪ねると、こちらは本格的なプロの養成機関であった。

生徒の沢田ゆりさんは、まさに「心の底から靴を作りたくなつた」ひとりだ。

「以前は、動物園の飼育員としてペリカンやワオキツネザルを担当していました。飼育員も夢の職業でしたが、靴づくりも捨てがたかつたんです。だって、一枚の革が立体になって人を支えるものになるなんて、靴つてすごいと思いませんか」

沢田さんは1年間で10足の靴を作り上げ、すでにある工房で研修に入ることが内定している。大山チルドレンたちは、確実にもものづくりの喜びを味わい、それを生かせる糧にしている。大山さんが言う。

「西成は人種も仕事も多様な、何でもアリの町。西成に育つたおかげで、僕には偏見というものがひとつもないんです。

こんな人間に育ててくれた西成の先人たちへの恩を、なんとかして次の世代に送

## 編集部 オススメ!

### ヌーメロウーノの革スニーカー

大山一哲さんが代表の靴メーカー・ロカシューのブランド「ヌーメロウーノ」の革靴。カジュアルな雰囲気ながら、ツヤある牛革は一級品。遊び心のあるデザインにこだわった履きやすい一足。  
革スニーカー 39,000円(ヌーメロウーノ)

り届けたい。僕がやつてるのは恩返しじやなくて、恩送りなんです」

大山さんによれば、靴の真価は修理でソールを剥がした時に分かるという。本物は、見えない部分がつよいそうだ。

やまだせいき/ノンフィクション作家。1963年、富山県生まれ。著書に『東京タクシードライバー』(朝日新聞出版社)、『パラアスリート』(PHP研究所)など



沢田さんの靴づくりのようす。師匠・大山さんも「入学1年でこの仕上がりはすごいでしょ?」とこっこり